

# 結

絞首台の鐘が、からころ鳴っています。  
処刑された遺体が、風にあおられて揺れているのです。

「……私が殺したようなものだ」

あなたはずっと、後悔していました。  
自らの発言が、疑いあいの席が設けられるきっかけになったと。  
そのせいで、お互いを傷つけあう場が生まれてしまったと。

あなたは、人間でないものに投票するはずでした。  
人間の境界を定義して、人間でないからと切り捨てようとしてしました。  
でも、あなたは迷っていたのです。

時間の長さの違いこそあれ皆、今まで同じ場所に生活していました。  
この話し合いが起こるまで皆、よき隣人であったのです。

その隣人たちのいずれかが人の定義から外れたとして、  
それは処刑に足る理由となるのでしょうか？

「はは……、私こそが罪深きものであったというのに」

あなたの悔恨は、もう取り返しがつきません。  
いつかまた旅に出るその時も、この罪だけは手放せないまま  
ずっと抱えていくしかないのでしょうか。

+++++

END-M-4：『懷疑の迷路』